

お宝スポット



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第11号 平成28年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

「双盤念仏」をごぞんじですか？

● 第11号の特集は「飯能市の双盤念仏」

今回は、飯能市内に伝わる民俗芸能「双盤念仏」を取り上げます。お囃子や獅子舞はごぞんじの方でも「双盤念仏」となると…。それもそのはず、

県内で今でも実際に演奏されている所は数えるほどですから。

そんな貴重な芸能が、飯能市には今も脈々と伝わっています。

特集「飯能市の双盤念仏」

飯能市の双盤念仏

飯能市文化財保護審議委員会委員
小野寺 節子

1

はじめに そうばんねんぶつ「双盤念仏」とは、どんなものなのでしょう。

まずは「ナアーア ムーウー」などと、声を出してみましよう。どんな調子でどんな声を出したらよいのか、なかなか見当もつきませんね。念仏の文言「南無阿弥陀仏」を引き延ばし、とくに母音をはっきりと発音しながら声を出します。これは引声いんせいという唱え方で、「引声念仏」といいます。念仏は、一人の唱えに合わせたり、皆が同時に唱えたりしますが、何人がで順に唱え、合唱のように合わせていく唱え方も出てきました。しかも、大太鼓や鉦かねを叩いたり合わせたりしながら唱えるようにもなりました。多くの場合、太鼓は、胴長の太鼓で、打面の前から2本のバチで打ち込み、鉦は、鳥居型の枠に、底を平らにした大きなフライパンのような鉦を吊るし、打つ人とT字形になるよう置き、その鉦の裏底しゅもくを撞木というバチ1本で打ち込みます。その音や響きは実に大きくて、思わず耳を覆いたくなるような具合です。

これらの唱えや響きは、地域の五穀豊穡や悪疫退散を願ひ、家々の安全や繁栄を願ひ、地域の人々によって行



落合西光寺双盤念仏

われてきました。

こうした唱え方がどのように発生し、飯能市域に伝わって来たのか、はっきりとしない部分もありますが、念仏を唱えることで救われるという教えが広がるとともに、信仰心に芸能性が加わりながら、京都や鎌倉などで発達した唱え方が、近世に入る頃から関東地方にも広く伝わり、神奈川県、東京都、埼玉県などに伝えられていたことがわかります。江戸東京の地域では、多摩川沿岸、浅草寺などからの伝播の系譜がみられ、埼玉県内では、所沢市、狭山市、入間市、飯能市、日高市など県西部に伝

えられています。

それぞれの地域では、地元の信仰行事と密接に関わったり、参詣する人々を楽しませる工夫を重ねたり、あるいは念仏講中（唱える人々の組）同士で、技の教え合いや競い合いをすることもあったといえます。

2 飯能市の双盤念仏 飯能市では、落合の西光寺薬師堂、川寺の大光寺虚空蔵堂、川崎の普門寺観音堂などのほか、矢廬の浄心寺、双柳の秀常寺、平松の円泉寺などでも双盤念仏が奉納されたり、行われたりしていました。飯能市域には、江戸時代の後半頃に伝わったと考えられ、浅草流といわれる系統が3か所で行われていましたが、唱える人々や奉納の機会の消滅、鉦自体が戦時中に供出されたことなどから、存続できなくなった所が大半です。

3 落合の双盤念仏 そうした中で、地元の熱意や努力で現在でも行われているのが、落合西光寺薬師堂の双盤念仏です。戦後の中断期を経て、昭和60年に「西光寺浅草流双盤念仏保存会」が結成され、今に至っています。双盤念仏は、西光寺の元旦祈禱祭・盂蘭盆会大施食会（8月14日、お施餓鬼）ではお寺の本堂で、落合薬師堂の春（4月12日）と秋（10月12日）の例祭では、お堂の中で奉納されています。「落合の薬師様（薬師如来像）」は、天正18年（1590）に、小田原北条氏に関わる滝山城（八王子市）より、移されたといわれています。目の病に効能があるといわれ、目の絵馬がたくさん掛けられています。

では、実際にどのように唱えるのか、見てみましょう。お堂の本尊前に太鼓（大親）が座し、その後ろに、本尊に向かって左側から、一番鉦（親鉦）、二番鉦、三番鉦、四番鉦（尻鉦）が正座します。皆が揃うと「一礼」し、「十三鉦」「念仏（四へん返し、五へん返し）」「掛け念仏」「せめ込み」「玉入れ」「大山越し」「たつがしら竜頭」「小山越し」「天地の玉」「十三鉦」と続き「拜礼」して終ると加藤奕雄氏が著わした『浅

草流落合薬師尊伝承双盤念佛口伝』（昭和52年）には、順番や演奏方法が記されています。演奏は、太鼓のあと、一番鉦から四番鉦が順に行っていき、「念仏」では各鉦が引声と打音を入れ、「掛け念仏」では太鼓と各鉦が交互に入れていきます。「せめ込み」では全員が速度を速めたり整えたりしながら、唱えていきます。「玉入れ」はハイライトの一つで、互いの息が合わないとうまく聞こえません。その後は、大きい音から小音にしていたり、打音を一致させたりして、締めくくりとなります。一回の奉納は、全体が大きなストーリーになっているのがよくわかります。

保存会の方々の話では、月に3回ほど集まって練習をしているといえます。基本的な唱え方と打ち方を覚え、まず尻鉦から加わっていくといい、太鼓は全体のリーダーであり、指揮者でもあるといえます。タイミングや速度を合わせるために、近年はメトロノームなども利用していると聞きました。メトロノームに合わせながら、懸命に練習している様子は、頼もしくもほほえましくも思えます。

4 おわりに 薬師様の春と秋の例祭は、山里のお堂前に地域の人々が集い、読経や念仏、本尊のお参り、茶菓を楽しみ、抽選会の品物を頂いて過ごす穏やかな一日です。伝統を伝える努力と地域を思う姿は、鉦の音とともに「市民のお宝」ではないでしょうか。



お施餓鬼での演奏

特集「飯能市の双盤念仏」インタビュー「人生が音に出る — 双盤念仏を受け継ぐ —」

「落合西光寺双盤念仏(落合の双盤念仏)」は、市内落合で現在も演奏されている双盤念仏です。一時は中断に追い込まれながらも、関係者の熱意により復活を果たしています。ただ、他の民俗芸能と同じように、後世への継承に苦慮しています。落合の双盤念仏の伝承団体である西光寺浅草流双盤念仏保存会では、平成

27年度に文化庁からの補助金を受けて、後世への継承に役立つ映像記録の作成に取り組んでいます。

そこで同保存会の小島正義会長、小嶋一相談役から演奏時の聴き所や映像記録作成についてなど、いろいろとお話を伺いました。

※読みやすさを考慮してお二人の話を再構成して掲載しています。

—まずは、現在の会員数と年齢構成について教えてください。

現在の会員数は約10名です。年齢構成は50~70歳代で全員男性です。女性が参加してはならないということはないのですが、昔は家の跡継ぎのみに口伝で教えていた名残があるのかもしれませんが。もちろん今は跡継ぎ息子以外でも参加できます。

—途絶えてしまったものを復活なさっていますが、どのような経緯によるものでしょうか。

戦争による金属供出により、一度は途絶えてしまいました。昭和50年ごろのことですが、鉦を叩ける人が80歳代となり、このままでは知らない人ばかりになってしまうという危機感から有志が集まって練習をはじめ、昭和52年に復活に至りました。また、当時の西光寺のご住職が熱心に働きかけたことも大きなきっかけの一つです。

—復活の際にはご苦労も多かったのでは。

当時は太鼓を叩ける人が既になかったため、川寺の双盤念仏の方からご指導を頂きました。ただ、落合のものとは全く同じではなかったため、記憶を頼りに少しずつ昔の形に修正していきました。また、口伝により伝承していましたので、人により鉦も叩き方が若干異なっていました。たまたまメモを残していた人がいたため、そのメモを基に演奏方法を統一するなどして現在の形に整えていきました。

—用具などはどうされたのですか。

供出してしまったため、新たに購入するまで鉦がありませんでした。そのため代用品として、当時は牛を飼っている家がありましたから牛乳缶の蓋や鍋を使ったり、鉄板を円形に切ったもので鉦を自作したりして練習していました。

—演奏の聴き所を教えてください。

「せめ込み」から「玉入れ」という部分にかけてが最高に盛り上がります。「玉入れ」がきっちりできると演奏している方はもち

ろんですが、聞いている方も気持ちがいいと思いますよ。

—演奏で難しい所はありますか。

演奏している5人の息を合わせるのが難しいですね。4枚の鉦の音が1つの音に聞こえるのが理想ですが、呼吸が合わないとうまくいきません。そのため本番が近くなりますと、本番と同じメンバーで練習するようにしています。また、普通の歌と違って歌詞が意味のある言葉と言うよりも掛け声に近いものですから覚えるのが難しいですね。

—太鼓でも難しい所はありますか。

「せめ込み」というクライマックスの部分では「自由打ち」という演奏をします。1分間に170~180回で打っている鉦をバックに太鼓を自由に打つのです。「自由に」と言われてもいざとなると難しいものです。しかも「打つ人のカラーを出せ」と言われていますので、先輩の真似をしているだけではダメなのです。その人のオリジナルでなければなりませんので大変に厳しい部分です。

—太鼓を打つ人のセンスが問われる訳ですね。

そうですね。それに打っている人の心が太鼓には素直



鉄板で自作した鉦

に現れます。あれこれしようと考えて手と頭が一つにならないようですと必ず間が外れます。「しまった」と思って叩くと聞いている方にも伝わるものです。たとえ間違えても、とぼけて叩くのも技術ですよ(笑)。「見ている人の9割は分からない人だから安心してやれ」なんて先輩からは励まされもするのですが、やっている方としては悔しいものです。

——今回、記録作成という事で撮影・取材を受けられました。普段とは異なりませんか。

普段とは違う緊張感がありました。お祭りだと一杯ひっかけてから演奏できますが、カメラの前ではそうはいきませんからね(笑)。今まで何気なくやっていたことも、改めて撮影となりますと意識しますし。後世に我々の演奏を残そうという事ですから、すごいことをしているなと改めて思いました。

——撮影時の演奏で難しかったところは。

途中からやってくださいと言われるのが難しかったで



すね。いつもは流れの中でリズムに乗ってやっていますので。いきなり途中から演奏しようとしても思い出せないこともありますよ(笑)。

——シンプルなだけに難しい芸能ですね。

演奏している側の息が揃うのが何よりです。太鼓がうまくいかないと鉦がつかれてしまいますし、鉦が一定の

リズムで叩かなければ太鼓は打ちにくいものです。お互いの息が合わないと疑心暗鬼になり、音に迷いが生じ、聞いている人には耳障りな音になります。そのため、普段からメンバーの十分な意思疎通を心掛けています。

——奥が深いですね。

やればやるほど奥が深いと感じますね。格好つけようと思うと間違えますので、何も考えず無心で演奏すると良い音が出ます。だからでしょうか、先達たちの演奏を聴いているとその人の人生が音に出ているように感じる時もありましたよ。



飯能市の双盤念仏は、江戸時代に伝わった芸能です。当時としては最先端の芸能で、人気を博しました。打楽器だけのシンプルな演奏ながら、腹の底に響く力強いリズムが当時の人々を虜にしたのでしょ。中断の苦難を味わいながらも復活した「秘話」も魅力的です。

今回の映像記録事業により落合の双盤念仏は、未永く記録として残されることになりました。でも「百聞は一見にしかず」です。ぜひ、落合のお祭りに足を運んで、生の演奏を体感してみてください。きっと「市民のお宝」であることを実感されることでしょう。